

鹿児島県

種子島

写真・文 小原佐和子

新古が交差する島
伝統を次世代につなぐ
赤米神事

宝満神社の御田植祭は、夜明け前の松原堅二宮司による「シュエーと
り」の神事から始まる。シュエーとは海砂をタマンダで包んだもの。



シュエーは御田の森の祭壇や入り口に供える。

苗代を引き、
お供えし、
御田の森での
神事を待つ



1

- ❶ 古代赤米の苗。
- ❷ 宝満神社の社殿。
- ❸ 昨年収穫された赤米の稲穂を手に、「種の伝承が何より大事」と話す松原宮司。赤米の苗床づくりから管理を自ら行なっている。



3



2



朝から氏子総代らが集まる。神田であるオセマチの周囲に色旗と竹を立て、注連縄をはる。写真奥にある小高い山が御田の森。

種子島南部の宝満神社（南種子町）

は、島に五穀の種子をもたらしたと伝わる玉依姫（たまよりひめ）を祀り、由来がある赤米を保存、栽培している。神社では毎年四月三日に国の重要無形民俗文化財である「種子島宝満神社の御田植祭（うへまつり）」が執り行なわれる。令和八年も地元の荃南（けいなん）小学校の男子児童や地域住民が参加して、オセマチとよばれる神田に赤米の苗を植えた。御田植えの後には神楽が奉納され、豊作が祈願された。

今回から、田植唄の唄い手として地元の小学生が加わった。新たな後継者の誕生と活躍に、参列者からは温かい拍手と声援が送られた。宮里照夫総代長は「伝承が私たちの使命。今年は嬉しい希望の年になりました」と喜びの言葉を口にした。地域が誇る伝統行事の誠実な継承活動が実を結び、新たな担い手が生まれている。



2



3

唄と太鼓に合わせ 赤米の御田植え後、 御田植舞を奉納

1 御田の森での神事。中には珊瑚の祭壇があり、赤米や赤米の苗、シュエーなどが供えられている。御田の森への立ち入りや神事は女人禁制である。

2 松原宮司がオセマチの四方を抜いて清め、御田植えが始まる。

3 エブリという道具で田をならす。



1

地元小学生も参加し、にぎにぎしい御田植え。毎年参加している子どもたちが多く、慣れた手つきだ。



4



自ら田植唄の唄い手の後継者に志願したという小学5年生の原田蒼生さん。お披露目となったこの日、師匠の雨田健二郎さんの指導を受けながら立派に役目を果たした。

④「作り拍子」と太鼓に合わせて、オセマチに苗を植えていく。肥料や農薬を使わない、昔ながらの方法で栽培している。

⑤ 御田の森に接する舟場で御田植舞が奉納され、神事は終了。舞手は宮里昭夫総代長と松原光江さん。



5



4



2



1

1 2 神事が終わると、茎永宝満神楽保存会による宝満神楽の奉納。交流のある岡山県総社市の備中神楽を参考にして、新たに創作されたという。玉依姫の舞では豊作が祈願される。



島でかつて行なわれていた牛馬による農耕をモチーフに創作された「ホイトウの舞」。

6



神楽舞に笑みがこぼれ
直会で赤米を食べて
無病息災を祈る

3

3 宝満神楽のユーモラスな動きに観客は大喜び。祭は世代を超えた地域の交流と楽しみの場のひとつになっている。

4 神楽に参加したみなさん。子どもたちも大活躍だった。



4



6



5

5 6 最後に直会が行なわれ、前年に収穫された赤米のおにぎりなどがふるまわれる。シャニン（月桃）の葉で包まれたおにぎり、煮しめ、トビウオなどで、食すと1年間無病息災に過ごせるとされる。オセマチで収穫された赤米は厳格に管理され、年に1回この場でしか食べられないという。参加者全員で「めでた節」を歌って、行事は終了。

鉄砲伝来の地に 息づく 伝統と最先端



❶ 西之表市の鍛冶職人・梅木昌二さんは島にUターンし、鍛冶の技術と伝統、そして製作道具の多くを師匠の牧瀬義文さんより受け継いだ。

❷❸ 種子鋏は全工程が手作業の逸品で、県指定伝統工芸品。

1



3



2



白米を祀る西之表市の浦田神社。境内の御種まきの石から祭神の鷺草葺不合尊（うがやふきあえずのみこと）が稲の種子をまいたとされる。鷺草葺不合尊は宝満神社の玉依姫と夫婦神である。



南種子町の種子島宇宙センター内にある「宇宙科学技術館」は、ロケットや宇宙などさまざまな分野を楽しく学べる施設。



4 南種子町の観光物産館であるトンミー市場に設置された、電子地域通貨「あば!Pay」の専用チャージ機。

5 種子島中央高等学校の正門にはAR(拡張現実)キャラクターと記念撮影ができるフォトスポットが設置されている。新設されたミライデザイン科による取り組み。



鉄砲伝来の地、種子島には鉄の製作技術も伝わり、種子鉄とよばれる伝統工芸品に発展した。梅木昌二さんは全工程を昔ながらの手作業で行なう唯一の鍛冶職人だ。島で三七代続く鍛冶職人に弟子入りし、その技術を習得して生産を続けている。

一方で、島内には日本最大のロケット発射場があり、「日本で最も宇宙に近い島」でもある。ロケットの打ち上げが見渡せる公園や、宇宙開発について学べる施設が整備され、観光の大きな柱となっている。電子地域通貨の普及・活用が進む自治体や高校にAIなどを学習する学科が新設されるなど、先端技術を活用した島づくりがなされている。

豊かな自然と伝統、そして最先端の宇宙事業が共存する種子島。時代に応じて地域資源を活かしながら、次世代への継承を目指す、連綿と続く島の歩みがうかがえた。

豊かな自然と
そこで育まれる特産品



1



3



2

1 水田と防風林、前之浜海岸を一望にできる七色観望所。

2 北限分布となる湊川地区のメヒルギ自生地。

3 国上太田のへゴは小川の流域約1kmにわたり自生。

浜田海浜地にある千座の岩屋は、荒波によって作り出された海蝕洞窟。幻想的な絶景は観光客から特に人気が高い。





4 種子島産赤米のアイスは、たねがしま赤米館などで購入可能。

5 有機農業の支援に力を入れ、「オーガニックビレッジ」を宣言する南種子町。町内のトミー市場では有機農産物コーナーが設けられる。

6 中種子町のサトウキビ畑。サトウキビは種子島全域で栽培される主幹作物だ。



種子島は鹿児島本土から南東に約40kmに位置し、面積約445km²の南北に細長い島。北から西之表市、中種子町、南種子町の3つの自治体で構成され、3市町合わせて25,871人が暮らしている（令和8年2月末時点）。サトウキビや安納芋など農業が盛んなほか、鉄砲伝来の地や国産ロケットの発射場、サーフィンのメッカとしても知られ、観光業にもぎわいをみせる。

7 黒糖は製造工場によって、風味がそれぞれ異なるという。お土産品としてさまざまに加工されている。

8 冬季はタンカンの出荷が最盛期、濃厚な味わいが魅力。

9 ショコラドエークラは中種子町にあるクラフトチョコレート店。島の素材にこだわり、1粒1粒が宝石のようだ。



◀◀ 「特集」(P50～)、「島の精神文化誌」(P76～)、「短報」(P100～) もあわせてお読みください。